

アイデンティティは下位階層から自己組織化する

Self-organized Identity

岡 林 春 雄

Haruo OKABAYASHI

アイデンティティは下位階層から自己組織化する

Self-organized Identity

岡 林 春 雄

Haruo OKABAYASHI

問題提起

アイデンティティ (identity) は、「自己同一性などとも訳される。自分は何者であるか、私がほかならぬこの私であるその核心とは何か、という自己定義がアイデンティティである。何かが変わるとき、変わらないものとして常に前提にされるもの (斉一性、連続性) がその基軸となる。アイデンティティの問題は、常に心理・社会的、心理・歴史的であり、個人史においてはとりわけ青年期に顕在化するが、1960年代の黒人解放運動、第三世界の自己解放運動の中でも重要な役割を果たしてきた。」(ブリタニカ国際大百科事典, 2008) と説明されている。自己同一性 (self-identity) というテーマは、心理学において何十年にもわたって注目を浴びてきたように重要なテーマである。自己同一性に到達するために、自己概念、自分自身についての知覚、感情、そして、同一性、恒常性のとらえ方についての研究がなされてきた (Oosterwegel & Wicklund, 1995)。研究者たちは、自己と同一性についてそれぞれの視点で論じてきたのだが、理論的には焦点化できなかつた。伝統的に理論家は、認知構造として自己と同一性をとらえ (Hattie, 1992; Marcia, Waterman, Archer, & Orlofsky, 1993)、そして、その構造は安定した心的表象として考えてきた。

Demo (1992) は、自己概念はいつも安定しているという見解に批判を加えているが、それだけでなく、この自己と同一性の構造のとらえ方、そして、自己同一性の安定性という点、本当にそれでよいのだろうかという疑問がある。人は、物心がつきだすと何か自分の思い通りにならない他者の存在を意識しだすとともに、他者存在の認知から自分というものの意識が生まれてくる。その自己意識は、いろいろな経験とともにゆらぎをとめないながらパターンまたはリズムが生まれ、それが一生、続くのではなかろうか。それ故に、これまで言われてきた、斉一性、恒常性、安定性とは違った性質が自己同一性にはあるのではなかろうか。本稿では、自己同一性という概念の再考から、新しい考え方を検討したい。なお、自己と同一性を分けて考えようとする研究者もおり (例えば、Camras & Michel, 2001)、そのような研究者の論述は自己と同一性を分けているが、元来、同一性 (identity) とは自己と対象との関係の漸成説を基礎として Erikson が造出した概念であるので、本稿では、自己と同一性という概念は分けず論を進め、また、アイデンティティ、自己同一性、同一性等々の用語は文脈上使いやすいものが出てくるので、同義とし混在を許すこととする。

従来のアイデンティティのとらえかた

Erikson の考え方

このアイデンティティという用語を有名にしたのは、なんといっても、精神分析学者で、心理社会的発達理論を提唱した E.H. Erikson である。Erikson は、アイデンティティ確立を青年期の発達課題とした。また、アイデンティティ確立という困難な発達課題に立ち向かう青年期には、アイデンティティの拡散といった精神的危機に陥る可能性があるとした。さらに、Erikson は、アイデンティティは、明瞭な

自己意識が、過去から現在までの時間的連続性に支えられ、幼少期からの自分と現在の自分が同一の自己であるという記憶の一貫性に支えられているという。これを自己の一貫性といい、自分は他の誰でもなく自分として生きる他はないとする「自己の独自性 (唯一性)」とともにアイデンティティを構成している。

さらに、自己同一性を Erikson (1959) の「自我同一性」から詳述しておきたい。Erikson は、S. Freud の精神的発達諸段階を基礎にして、彼独自の人間発達漸成説を展開した。Erikson は青年期の発達課題と心理的危機として「自我同一性の確立 対 同一性拡散」を位置付けたが、同一性形成そのものは、青年期にはじまるわけでも終わるわけでもない。つまり、それは個人にとっても社会にとっても、その大半が無意識的な生涯つづく発達過程である。そして、その根源は最初の自己承認にまで遡ることができる。すなわち、母と赤ん坊のごく早期の微笑の交換の中に、すでに何らかの形で相互的な承認と結びついた自己実現とみなすべきものが含まれている。子ども時代のはじめからずっと、まるで自分が何者であるかおおよそわかってしまったように感じたり、そう思い込んだりするような仮の結晶化がおこる。そして、この仮の結晶化は、この問題を最も強く意識するという形ではじまるが、やがてはこのような自己確信が再三にわたっておこる心理・社会的発達の連続性の断絶によって崩れることになる。地域社会はその子どもが各発達段階で自分自身を、各年齢の個人によって代表されるさまざまな役割の階層的な秩序と調和した一つの完全な「人生設計」に向かって方向づけようとする。そして、家族、近隣、学校はより幼い子どもたちや、より年長の子どもたち、若い大人たちや年取った大人たちなどとの接触とそれらへの実験的な同一化 (複数) の多面性の中にいながらも、もっと年上のようになろうとか、もっと幼かった時のように感じたいとかの、さまざまな期待をごく幼い時から作り上げようとし始める。そして、それらの期待が心理・社会的な「適合性」に関する決定的な経験の中で、一步一步確証されるにつれて、これらの期待は一つひとつの同一性の一部と化してゆく。自我同一性という形で行われようとしている統合は、それぞれの発達段階における種々の同一化の総和以上のものである。

自己同一性の定義に関しては、Erikson にしても心理社会的発達という観点から包括的にとらえている。Erikson の論考は、第二次世界大戦直後という時代背景があり (「自我発達と歴史変動」1946)、20 年経った「同一性：若者と危機」(1968) での大きな社会変動ともなう青年の変化という問題があり、その問題をターゲットに集団同一性、自己同一性を論じ、そこには、健康なパーソナリティの成長と危機という明確なテーマが存在する。Erikson にとっても、自己同一性は出来上がっていくものであり、できてしまっているものではないのである。心理学における用語は、構成要素の相互作用から出来上がっていくというものが多く、それがまた生きているという特徴のひとつなのかもしれない。

一貫性、安定性を重視した自己同一性

鱸・宮下・大倉・谷 (2014) は、これまでのアイデンティティ研究の流れを「アイデンティティ研究ハンドブック」にまとめており、さらに、近年の自己同一性に関する論考は、世界情勢から「アメリカ、中国を中心とした世界秩序の混乱の中での自己同一性」の問題を論じたり (Ikenberry, Jisi, & Feng, 2015)、移民の自己同一性の問題 (Innes, 2015)、「自伝的な記憶に臨床的な観点から迫り自己同一性の役割を見出したり」(Watson & Berntsen, 2015) と多岐にわたり、現在でも自己同一性の話題は、非常に重要だということがわかる。しかしながら、自己同一性のとらえ方が静的 (static) である論考が多いことは否めない。それは、これまでの研究視点がホメオスタシス (homeostasis) の考え方に代表される線形性における一貫性、安定性に向いていたことによる。この研究視点は、アイデンティティ研究に限らず、心理学、また、近接科学にあてはまることである。

Erikson が論じた青年期の発達課題としてのアイデンティティの確立は、青年期でアイデンティティが確立したように見えても、それで終わりではない。線形理論での安定性は一意であり、そこに到達

すれば、それが安定点である。しかし、人のように生きているものの心理は非線形で、その安定点は一意にはいかない。その安定点のひとつと考えられる概念に構造安定があるが、構造安定とは、力学系の集合を考えたときに、与えられた力学系の十分小さな近傍の力学系が質的に同じふるまいをするということである (Andronov & Pontryagin, 1937)。成人期になり、さらに、老年期になっても、人は「自分とは何者か」を探し求めているわけであり、そのような自己同一性のゆれがなくなれば「生きている」ことにはならないと言えるのかもしれない。

そもそも、アイデンティティの確立に向けては、アイデンティティ・クライシス (同一性拡散) が存在することが考えられてきた。同一性拡散とは、青年期の発達課題であるアイデンティティ確立がうまくいかない状態のことである。アイデンティティの確立が停滞して曖昧化しているために、「自分がどういう人間であるのかという自己意識 (自己概念)」を定めることができず、職業選択や進路の選択ができないなどの問題が起こってくる。「自分が何をやりたいのか、自分は今、何をすべきなのか」に対して明確な答えが出せないような状態が同一性拡散であり、多くの場合、現実的な社会環境にうまく適応できなくなり、仕事・学問・職業などへの興味や意欲も弱くなる。現在、マスメディアなどで取り上げられやすい心理的問題であるひきこもり、不登校、青年期モラトリアム (社会的決断の猶予期間) なども同一性拡散と密接な関係があると考えられる。つまり、同一性拡散は、アイデンティティのゆれがそれぞれ相互作用を起こしながら大きなゆれを作り出し「確立」とは異なる「拡散」の方向に分岐してしまった現象と考えられる。アイデンティティを確立するためには、それまでの価値観や判断基準、社会に対する姿勢を整理して心理的な再構築を成し遂げなければならない。社会的な役割や責任を引き受けて、安定した自己意識を持てるようになるまでの間、不安や葛藤が強まり、不安定な自己意識や精神的混乱などのストレス反応が見られやすい。程度の差はあれ、誰もが通らなければならない危機の時期であり、いったん形成したアイデンティティが様々な状況の変化で揺らぐときには、成人期以降にも同一性拡散は起こり得る。

本稿で提案するアイデンティティ概念

Harter (1983) は、自己概念、自己コントロール、自尊心を自己システムの構成要素だとしているが、この段階ですでに、自己同一性という概念は、単体ではなく、複数の構成要素から成り立っていることがわかる。そして、「自分はどのような人間なのか」、「自分とは何者なのか」といったいわゆる自己同一性 (Erikson, 1959, 1968) の感覚はどこからくるのであろうか。また、そのような感覚をもつ人間は、細胞からできている。その人間の細胞の数は、体重50kgの人で、およそ60兆個といわれており、そのうち赤血球という血液にある酸素を運搬する細胞は約20兆個である。人間の60兆個の細胞は、常に新しい細胞と入れ替わっており、4.5リットルから5リットルの血液は100日から120日間ですべて入れ替わり、骨も幼児期では1年半、成長期には2年半、70歳以上では約3年で入れ替わる。そのように入れ替わっていく細胞からできている人間の自己同一性はなぜ、ある程度の時間、続くのであろうか。そもそも、昨年の自分と今年の自分は同じ人間であるとなぜ考えるのであろうか。さらに、ソチ五輪・フィギュアスケート女子ショートプログラム (SP) のときの浅田真央 (直後のインタビューで「何が何だか自分でもわからない」と語る) とフリープログラム (FP) のときの浅田真央 (インタビューで「恩返しできた」と語る) は、同一人物でありながら、その心理はまったく違っていた。なぜ、そのような違いが生じてくるのだろうか。

人間の心理現象を研究しようとする上記のようないろいろな疑問が出てくる。そもそも、心理学の研究対象は、人間の何かの目標に対して直接または間接に指向している活動ならびにその思考プロセスである。そのような目的的行動 (purposive behavior) ならびに目的的思考は、単に一局部の筋肉や

腺の反応と違って、一連の反応群を含むひとまとまりの活動であるのが特徴であり、分子的行動に対して全体的行動、または、モル行動 (molar behavior) といわれる。

一生涯を通して変容するアイデンティティ

人の発達を追ってみよう。生まれたばかりの乳児は、母性と一体化している。自分が泣けばお乳を飲ませてもらえるし、オムツを交換してくれる。ところが、トイレット・トレーニングが始まり、反抗期を迎えるころになると、「お母さんはそう言うけど、自分は・・・」というように自己が芽生えてくることになる。自分の好みの色などが出来だすと、親が「今日は、この服を着ましょうね。」と言っても、「それ嫌。絶対にこっち!」と自己を主張するようになる。同一性は幼児の時期から始まる (Erikson, 1959)。幼児は、J. Piaget の感覚運動期の第 3 段階で新しい行動や出来事を繰り返し再現しようとし出し、過去と現在のスキーマを比較して、統合し始める。感覚運動期第 4 段階で、幼児は対象についての形・大きさの恒常性を獲得し、目前から消えた対象を探し出そうとし出す。このような発達は、幼児が自分という感覚を発達させ、最近の活動と過去の活動の間の因果関係リンクの理解を発達させることを意味している。Stern (1985) は、この時期が自己の創発 (emergence) の時期だととらえている。しかしながら、全体としての自己に関わる過去と現在の一貫性は、4 歳までには発達しない (Fogel, 2001)。この年齢の後、子どもたちは自分の過去の経験を思い出すことができ、自分自身について語る事が出来だすととらえられる。ここには、言語と結びついた記憶の作用が関わっているのである。そして、このような自己は、「一貫した自伝的自己概念」(Provinelli & Simon, 1998) と呼ばれたり、「物語性の自己」(Stern, 1985)、「自伝的自己」(Nelson, 1992) などと呼ばれている。Ricoeuer (1996) は、「物語の同一性 (narrative identity)」を生涯にわたる変化の背景に対してもちこたえるパーソナルな話と定義している。同一性は、人生の過程における自己について何度も繰り返し語ることによって創発すると考えられ、コミュニケーション過程において形状が整ってくるのである。言い換えれば、自己はコミュニケーション過程において定義されるのである。自伝的記述においては、人は単に過去を思い返しているのではなく、「語っている瞬間、何が過去か、過去を作っているのである」(Bruner, 1990, p.122)。すなわち、自己は再帰的であり、生まれた時にプログラムされているような生得的なものではなく、また、自己の外からの刺激や働きかけによって直接的に影響を受けるものではなく、自己システムの内部から作りあがってくるものなのである。

また、同一性は、社会・文化的な物語を自分の物語のフレームにして語られることがある。人は、社会・文化的な基準と調和、また、葛藤の中で自己を感じるのである。外国で生活するようになり、自国にいたときには感じなかった国民意識 (例、日本人意識、すなわち日本人としてのアイデンティティ) をもつようになるのである。国レベルの大きさでなくても、小学生の頃、友だちの家に行って食べた梅干しが、自分の家の梅干しと見かけや味が違っていることから、自分の家の習慣と友だちの家の習慣が違っているということに気づき、自己について思いをはせるようになる。自己比較感情、とくに他者や文化基準 (例、ジェンダー役割) との比較は 3 歳頃までに創発する (Emde & Oppenheim, 1995; Kitayama, Markus & Matsumoto, 1995; Reddy, 1991) と言われている。そのような自己比較感情は、発達段階で関わる学校や職場や社会の中で、成績の比較、足の速さの比較、仕事の評価の比較、結婚ができた・できない等々の比較を通して自己ならびに同一性は出来上がってくる。ただし、ここで留意しておかねばならないのは、同期入社知り合いは結婚したのに、自分は結婚していないといった自己の外部状況が直接的に自己同一性を作り上げるのに影響しているのではなく、自己がその状況をどのようにとらえるのかという内部思考が自己同一性を作り上げているのである。

現代社会では、青年期を過ぎて、成人期になっても自分探しをしている人はたくさんおり、また、一生涯のうち退職後の年数が増えた日本社会では、60 歳代以上の高齢者がストーカー加害者となった

犯罪が、平成25年は1919件と10年前の約4倍に達したことが警察庁のまとめでわかっている。加害者の大半は男性で、社会的地位の高かった人も多く、拒絶されることに慣れておらず、恋愛がうまくいかないだけで行動をエスカレートさせてしまう（産経新聞web版, 2014）と報道されており、これまで、高齢者になると自己同一性が高次に安定してくると一般には考えられてきたが、自己同一性の固着は思考の固着とともに、不適応現象を引き起こす原因になっているのかもしれない。生きているシステムは非平衡状態にあり、これで終わりということはない。これで終わりという形で固着してしまえば、そのシステムは死を意味する。自己同一性は、安定性、恒常性を軸に考えられてきたが、固着すれば問題が起こり（線形理論での安定性）、ゆらぎをともなう非線形理論での安定性がメンタルヘルス的には求められるであろう。

自己同一性が表出されるにいたる時間階層

人の心理のように生きているシステムは自らを生成するものであり（中村, 2010）、時間の流れにそって表出される。したがって、生きている有様を浮かび上がらせるためには、時間の流れに沿った描写が必要になる。そこで、自己同一性という生きているシステムの形成・変容を時間の流れの視点から見よう。

これまで見てきたように、人の心理にはゆらぎがあり、青年期の発達段階にある人が、いつも青年期の特徴を示す自己同一性を表出しているとはかぎらない。それは何故なのか考えてみると、時間には時間尺度という異なる階層での流れがあり、お互いの階層は秩序を作り出す方向とその秩序から解き放たれる方向に相互作用していることがわかる。本稿では、3つの時間尺度を提案してみたい（Table 1）。

Table 1
時間尺度と自己の表出・感覚

	出来事	スキーマ（フレーム）	発 達
時間尺度	秒	分～時間	年
自己の表出・感覚	方向づけ	思考の仕方の枠組み	同一性（identity）
経験	その場その場での 感覚	フィードバックと フィードフォワード	意味づけ

第一の時間尺度は、秒単位のものであり、人は一瞬、一瞬、その場、その場での感覚を有しているところから始まる。人は、ある出来事に出会うと出来事を知覚することによって何かを感じている。山道で枯れ木を見たときへびだと思い、飛び退いたり。ここには、驚き、恐怖、安堵などの感覚が存在するであろう。また、飛び退くといった行為には、その出来事への対応、方向づけの意味がある。また、他者から何か言われ、何となく気になっていながら過ぎてしまった。何かもやもやした感覚があり、その人に対する警戒の方向づけが存在することになるかもしれない。

第二の時間尺度は、分～時間単位、そして、それより少し長いものであり、人は連続したパターンを形作るようになる。人は他者との関わりの中で、気になることを言われたら、「あの人は私のことを嫌っているのだろうか？」という疑問が「あの人は私のことを嫌っているに違いない」という信念（Ellis, 1984）を形作り、その思考がパターン化してくるようになる。その思考方法は、以前のことを思い出

したり、似たような出来事に遭遇することによってフィードバックされ、さらに、先の出来事に対してフィードフォワードすることによって、そのパターンは定着してくる。

第三の時間尺度は、年単位を超えて起ってくるものであり、これが同一性と呼ばれる、その人のユニークな恒久的な感覚につながる。この時間尺度は、発達時間とも呼ばれるものである。人は発達時間を通して自分自身という感覚を発達させる (Fogel, 2001)。人はスキーマ (schema) と呼ばれる、情報を理解し、解釈し、判断するその人特有のフレームをもっているので、現在の自己の経験と過去の自己の経験との類似性を見つけることは可能であろう。同一性というのは自己が時間を通して維持するものであり、この時間を通して自己が好む方向づけを有している経験なのである。その方向づけは、特定のスキーマゆえに、変化や安定性の特定の傾向をもった創造性のある特別な形態に入り込む (Bosma, 1995; Erikson, 1968; Hermans & Kempen, 1993; Lewis, 1995)。これまでの研究者たちは、同一性という用語で、青年期の時間経過を通して始まる特定の自己顕在化を意味していたのではなかろうか。

3つの時間軸に沿って、リアルタイムから発達時間への方向で見てきたわけであるが、同一性が形成されてくると、それによって逆の力動性が働き出す。その人が、その人特有の同一性を持っているがゆえに、同一性への意味づけによって、思考の仕方の枠組みが限定され、リアルタイムでの方向づけが制約を受けてくる。すなわち、これらの3つの時間軸をめぐるダイナミクスにおいて、自己は増大し、また、縮小することになる (Bosma, 1995; Haviland & Kahlbaugh, 1993; Lewis, 1995)。この議論は、個人を超えて、文化レベルまでいくかもしれない。文化における同一性の類型は、歴史的な時間の中で発達してきたのであろう。19世紀には、日本や西ヨーロッパ、北アメリカでの性に関する同一性 (gender identity) は男性と女性でまったく違っていた。それが、今やまったく違った価値観の中で生活している。文化的変化が個人やその個人間の関わりの変化の背景にあるとき、自己発達の非決定性は増大し、自由に発達する同一性を補完することになる (Cole, 1996; Erikson, 1968; Gergen, 1991)。ここまで見てくると、アイデンティティは、生まれた時からプログラムされているわけではなく、また、周囲から教唆されたわけでもなく、内部の下位階層の構成要素の協働作用から自己組織化 (北森・北村, 1996) してくるのだと考えられる。

結語

人が自分自身についてもっている知覚・認知、感覚・感情は、意識的であろうと無意識的であろうと、自然に身につけているものであり、われわれの日常生活の機能の内発的なものである。知覚・認知、感覚・感情は、自己同一性を作り出す構成要素であり、Erikson (1950) が述べている、個人的な感覚の持続、一体性、社会的再認 (social recognition) の感覚を守るために同一性の基本的な感覚を維持する認知とモード (気分) の相互作用を生み出すものであろう。人は同一性という一貫性を保ちながらも、自分の人生における新しい方向性を設定し新しい同一性を作り上げる。つまり、人間は方向づけをもっており、“being (～である)” と “becoming (～になる)” の間でバランスが働いており、同一性は力動的に創造され、さらに時間の経過とともに再創造される。“becoming” の観点からすれば、とくに発達的に変化している時期においては一貫性をずてることになる (Dunne, 1996)。就職、昇進、結婚、等々の出来事をどのようにとらえるのかによって、人は同一性を失う経験をもつことになるかもしれない (Erikson, 1968)。

本稿で疑問として提示した「人の細胞はどんどん変わっていくのに、自己同一性は何故、ある程度の期間、変わらないのか」という話題は、時間の階層性の特徴からとらえることができる。自己同一性レベルの発達時間において表出されてくる特徴は、それなりに長い時間レベルでの特徴として保障されているが、実際のところ、その時間の下位尺度のレベルではゆらぎが常に起こっているのである。したがって、発達時間では青年期にいる浅田真央にしても、リアルタイムの段階では「真っ白になり、

自分がわからなくなる」ことが起こってくるのである。自己同一性はある程度の時間、持続すると言われるが、その根底にあるのはゆらぎであり、ゆらぎの相互作用が秩序と秩序からの解放の微妙なバランスを生み出しているのである。ある程度の時間、持続するアイデンティティは、下位階層のそのようなゆらぎをとともなう構成要素の協働から自己組織化してくると考えられる。

参考文献

- Andronov, A.A. & Pontryagin, L.S. (1937). **Грубые системы** [Coarse systems]. *Doklady Akademii Nauk SSSR* 14 (5): 247–250. Cited in Kuznetsov (2004).
- Bosma, H.A. (1995). Identity and identity-processes: What are we talking about? In A. Oosterwegel & R.A. Wicklund (Eds.), *The self in European and North American culture: Development and processes* (pp. 5-17). Dordrecht: Kluwer.
- Bruner, J.S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- ブリタニカ (2008). 自己同一性. ブリタニカ国際大百科事典 電子辞書対応小項目
Buritannica Japan Co., Ltd./Encyclopedia Buritannica Inc.
- Camras, L.A., & Michel, G.F. (2001). Commentary: Fish, foxes, identity, and emotion. In H.A. Bosma & E.S. Kunnen (Eds.) *Identity and emotion: Development through self-organization* (pp.89-92). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Cole, M. (1996). *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge, MA: The Belknap Press.
- Demo, D.H. (1992). The self-concept over time: Research issues and directions. *Annual Review of Sociology*, 18, 303-326.
- Dunne, J. (1996). Beyond sovereignty and deconstruction: The storied self. In P. Ricoeur (Ed.), *The Hermeneutics of action* (pp. 137-157). London: Sage.
- Emde, R.N. & Oppenheim, D. (1995). Shame, guilt, and the Oedipal drama: Developmental considerations concerning morality and referencing of critical others. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride* (pp.413-438). New York: Guilford Press.
- Ellis, A. (1984). Rational-emotive therapy. In R.J. Corsini (Ed.), *Current psychotherapies* (pp. 197-238). Itasca, IL : Peacock.
- Erikson, E.H. (1946). Ego development and historical change: Clinical notes. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 2, 359-396.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E.H. (1956). The problem of ego identity. *The Journal of the American Psychoanalytic Association*, 4, 56-121.
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. Psychological Issues Vol.I, No.1. Monograph 1, New York: International Universities Press.
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- Fogel, A. (2001). *Infancy: Infant, family, and society*, (4th ed.). Belmont, CA: Wadsworth.
- Gergen, M.M. (1991). *The emergence of the relational self*. New York: Basic Books.
- Harter, S. (1983). Developmental perspectives on the self-system. In P.H. Mussen (ed.), *Handbook of child psychology*, vol.4, pp.275-385. New York: Wiley.
- Hattie, J. (1992). *Self-concept*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Haviland, J.M., & Kahlbaugh, P. (1993). Emotion and identity. In M. Lewis and J.M. Haviland (Eds.), *Handbook of*

- emotions* (pp.327-339). New York: Guilford Press.
- Hermans, H.J.M., & Kempen, H.J.G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. San Diego, CA: Academic Press.
- Ikenberry, J., Jisi, W., & Feng, Z. (2015). *America, China, and the struggle for world order: Ideas, traditions, historical legacies, and global visions*. Palgrave Macmillan.
- Innes, A.J. (2015). *Migration, citizenship and the challenge for security: An ethnographic approach*. Palgrave Macmillan.
- 北森俊行・北村新三(1996). 自己組織化の科学 オーム社
- Kitayama, S., Markus, H.R., & Matsumoto, H. (1995). Culture, self, and emotion: A cultural perspective on “self-conscious” emotions. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions*, (pp.439-464). New York: Guilford Press.
- Lewis, M.D. (1995). Cognition-emotion feedback and the self-organization of developmental paths. *Human Development*, 38, 71-102.
- Oosterwegel, A., & Wiklund, R.A. (eds.)(1995). *The self in European and North American culture: Development and processes*. Dordrecht: Kluwer.
- Marcia, J.E., Waterman, A.S., Matteson, D.R., Archer, S.L., & Orlofsky, J.L. (1993). *Ego identity: A handbook for psychosocial research*. New York: Springer.
- 中村桂子 (2010). 「生きている」を考える NTT出版
- Provinelli, D.J., & Simon, B.B. (1998). Young children’s understanding of briefly versus extremely delayed images of self: Emergences of the autobiographical stance. *Developmental Psychology*, 34, 188-194.
- Reddey, V. (1991). Playing with others’ expectations: Teasing and mucking about in the first year. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mindreading*, (pp. 143-158). Oxford: Basil Blackwell.
- Ricoeur, P. (1996). *The hermeneutics of action*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 産経新聞 web ニュース(2014). Retrieved from <http://www.iza.ne.jp/kiji/events/news/140403/evt14040309260005-n1.html> (Oct.15, 2014)
- Stern, D. (1985). *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books.
- 鑪幹八郎(監修)・宮下一博・大倉得史・谷冬彦(編集)(2014). アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版
- Watson, L.A. & Berntsen, D. (2015). *Clinical perspectives on autobiographical memory*. Cambridge University Press.